

## 『戦争と農業』

藤原 辰史 著

企画広報室長 吉田 行郷

本書は、農業技術史、食の思想史、環境史、ドイツ現代史を専門とする著者が、その知見を総動員して、様々な場所で語った食の歴史などについての講演内容を再編集して、六つの講義のスタイルにまとめ直したものです。

第一講は「農業の技術から見た二十世紀」、第二講は「暴力の技術から見た二十世紀」、第三講は「飢餓から二十世紀の政治を問う」、第四講は「食の終焉」、第五講は「食と農業の再定義に向けて」、第六講は「講義のまとめと展望」となっており、講義を聞いているような読みやすさもあって、終始、著者の豊富な知識をバックにした熱い語りに押されて、ぐいぐいと読めてしまいます。

農作業をできるだけ楽にやりたいという思いが、二十世紀に農業の機械化を進め、中でもトラクターがその中心的な役割を果たしたことの紹介から本書は始まります。世界各国で、トラクター導入により農業の効率を大幅に上げることに成功しました。しかし、これによって、それまで耕耘作業を担ってきた牛や馬の排泄物を肥料として農地に投入することができなくなってしまい、それが第二の農業技術の化学肥料の発展につながりました。そして、これらに続く第三の農業技術が農薬で、農薬の普及拡大が世界中の農民たちの気持ちを楽にさせる一方で、環境汚染の問題を各地で表面化させるという大きな負の影響を残すことにもなりました。最後に、以上の三つの農業技術を総括する品種改良についても語られます。以前の品種改良が長い時間をかけて好ましい品種を生み出してきたのに対して、「遺伝子組み換え」の技術が、短時間での品種改良を可能にしましたが、併せて明らかになった問題点についても紹介しています。

そして、これらのうちトラクター、化学肥料、農薬は、戦争の在り方まで大きく変えることになりました。そのターニングポイントが第一次世界大戦で、トラクターの技術から戦車生まれ、化学肥料が火薬となり、農薬の生産技術が毒ガスを生み出し、第一次世界大戦は、破壊力の大きな武器が初めて使われた戦争となりました。

そして、本書のハイライトともいえる第三講では、排除が前提の民主主義が、排除した者たちの飢餓を産み、それが第二次世界大戦におけるナチスの選民的飢餓計画や、

南の国々での慢性的な飢餓の顕在化と北の国々の「飽食」の時代の到来につながっていったことが紹介されています。民主主義が機能不全を起こし、そのことが終末感漂う第四講「食の終焉」に繋がっていったことを、著者は食の思想史とドイツ現代史の専門家の視点から明らかにしていきます。

第四講では、BSE、鳥インフルエンザの流行の原因や、ファストフードの肉が安価な理由、食料廃棄の拡大などから、現代の食の問題の根元にあるフードシステムの問題が示され、そこから著者は、食と農業の再定義の必要性を第五講で明らかにした上で、人類の食に関する暗い未来を少しでも明るくすべく私達が取り組むべきことを第六講で提案しています。

具体的な五つの提案については、読者の皆さんに本著を手にとっていただいで確認していただくことにして、私からは著者の読者に対して投げかけられた以下の一文を紹介して、このレビューを終えたいと思います。個人的には、これからの日本の農業、食の在り方を自らの頭で改めて考えるきっかけになった本でした。この本に出会えて本当に良かったと思っています。

「いまのように、何かに急がされる世界ではなく、即効性の世界をうまく生かしつつも、基本的には遅効性によって満たされている世界。仕込んでおいたものが、いつか、どこかで、それがたとえその人が死んだあとでも花開く、驚きと興奮に満ちた世界。個々の人間の働き方や生き方までも強制的に画一化させる仕組みを、ゆったりとした、それでいて強靱な仕組みに徐々に変えていけないのでしょうか。」(本文第六講から抜粋)



『戦争と農業』

著者／藤原辰史  
 出版年／2017年  
 発行所／集英社